



信念が、世の中を変えていく。「One's Way」でいこう。

iSM × 自然保護

撮影 / 我谷 康宏

環境問題への取り組みが 日常的に行われる社会へ

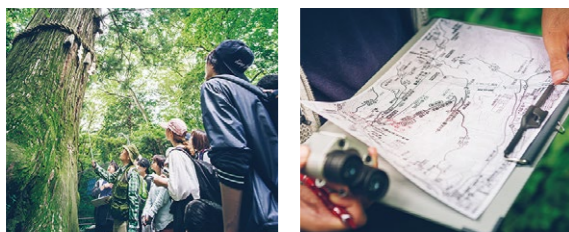
1960年代にいち早く環境問題を世に知らしめた生物学者レイチェル・カールソンは、著書『センス・オブ・ワンダー』のなかで、神秘さや不思議さに目を見はる感性の重要性を訴えた。それは、かけがえない自然を保護する意思となり、環境破壊や汚染の抑止力そのものとなる。

この感性を育む活動が日常的に行われている学び場がある。帝京大学文学部社会学科の大浦宏邦教授が指導にあたる、環境問題を研究テーマに掲げるゼミだ。特徴は、四季折々の美しさを身近に感じられる八王子キャンパスを起点としたフィールドワークにあり、実施する場所の選定から計画、準備や運営まですべてが学生主体で行われる。ゼミ長を務める松本雄太さん（文学部社会学科3年）に話を聞いた。

「私の場合は、育った地元のゴミ問題を目の当たりにして環境問題に関心をもつようになりました。帝京大学の八王子キャンパスは都市に隣接しながらも自然に囲まれているので、対比しながら環境について学べる最適なロケーションだと思います。このゼミには、環境問題に本気で取り組みたい学生が集まっています。環境の緑化やゴミの削減、自然の観察調査など活動内容が多岐にわたる点に魅力を感じています」

そう聞いて同行したのが、自然保護をテーマとした高尾山でのフィールドワーク。高尾山は年間約260万人が訪れる日本でも数の観光地だが、巨大都市の近郊にありながら自然林が数多く残る稀有な場所でもある。森林が建材や燃料としても主要資源だった江戸時代には、全国的に森林不足が顕在化していたというが、なぜ人工林化されずに自然林が残ったのか。その理由を明らかにすることが今回のフィールドワークの最終目標である。

学生たちがこの日に辿ったのは、多くの参拝者が訪れる薬王院を経て山頂へと続くコース。樹齢約450年の大杉をはじめとした自然林や生息する鳥・昆虫などに触れながら、動植物や史跡のマッピングを行うプログラムだ。大浦教授曰く、こうしたフィールドワークは、「神秘さや不思議さに目を見はる感性」を育むとともに、「自ら問題を発見し解決策を考えていく姿勢や力を養う」という。学生たちがめざす将来はさまざま。しかし、公務員となって環境政策に携わりたいと話す松本さんをはじめ、自分なりのアプローチで環境を守りたいという想いは同じである。地域での取り組みは、国や世界、そして地球全体につながる取り組みでもあり、経済や政治なども重要なテーマですが、健全な地球環境があつてこそ人々の営みは成立すると思うのです」と持論を熱く語る学生たちの根底には、フィールドワークによって芽生えたiSM（イズム）がある。「すべての人々が環境問題を自分事として捉え、日常的に取り組める社会に変えたい」。このようなビジョンや問題の本質を探究する心も、レイチェル・カールソンが訴えた感性なしでは生まれないはずだ。



左：たこ杉や杉並木などの自然林が数多く残ることで有名な高尾山。観察調査などを目的に全国から研究者が集うという。
右：動植物や史跡のマッピングを行うため、野外活動では自然班、歴史班、昆虫班、ボランティア班に分かれ実態調査が行われた。

 帝京大学

本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 <http://www.teikyo-u.ac.jp/>